

通時的観点からみたフランス語の否定辞¹

川口 裕司

(東京外国語大学外国語学部教授)

はじめに

ne...pas のように動詞を 2 つの否定辞ではさむというフランス語の否定形は、類似の現象が他のロマンス語において見られるものの、しばしばフランス語の言語特徴の 1 つとして見なされてきた。一方で、次の例のように、現代フランス語の口語では、しばしば ne の脱落が観察される。

(...) ben je sais **pas** moi je crois que les les jeunes actuellement ils ont beaucoup d'espérances malgré malgré le fait euh

「そりゃわからないけれど、そんな事実があっても、今の若者たちは、たくさん希望を抱いていると思うけど」(Tours の話し言葉コーパス)²

現代語におけるこうした ne の脱落については、すでに ASHBY (1976, 1991), COVENEY (1996), SANKOFF et al. (1977) 等を始めとする多くの論考が発表されており、ここでその現象について詳しく論ずることはしない。本稿の出発点は、ASHBY (1991) の提示した次のような変化過程である。

1	古典ラテン語	non	動詞	
2	古フランス語・中期フランス語	ne	動詞	(pas など)
3	古典フランス語	ne	動詞	pas
4	現代フランス語	(ne)	動詞	pas
5	未来フランス語		動詞	pas

以下では、この ASHBY の掲げた変化過程に基づいた議論を展開してゆくが、現代フランス語から未来フランス語への過程は議論の対象外とする。ASHBY は ne の脱落した否定形を、未来フランス語への進化の先取りであると考えた。この考え方に筆者は賛同できないが、

¹ 本研究は筆者が研究分担者を務める文部科学省科学研究費補助金「中世西欧文学の「間テクスト性」に関する文献学的・言語学的研究」(基盤研究(B)2)、課題番号 15320037、研究代表者 浦田和幸)からも補助を受けた。

² Tours の話し言葉コーパスについては、ルーヴアンカトリック大学文学部言語学科の「口頭コミュニケーションの言語研究 Étude Linguistique de la Communication Parlée (ELICOP)」プロジェクトの URL <http://bach.arts.kuleuven.ac.be/elicop/> を参照のこと。

ASHBY への批判については、稿を改めて論じたい。また、古典ラテン語の **non** 形から古仏語の **ne** 形への変化とその要因についても、興味深いテーマであるが、ここでは扱わないことにする。したがって、本稿が考察するのは、活用動詞の否定形の通時的変遷であり、その時期は、上表の 2 の古フランス語から 4 の現代フランス語に至るまでである。

1. 古フランス語期

カロリング朝の 2 人の王、シャルルとルードヴィッヒが 842 年にお互いに口頭で宣誓したとされる私文書の記録、いわゆる『ストラスブールの誓約』は、10 世紀の写本によって現在に伝わっているが、そこでは否定辞は **non** あるいは **nun** 形である。

『ストラスブールの誓約 *Serments de Strasbourg*』(842 年)

Si Lodhuuigs sacrament que son fradre Karlo jurat conservat et Karlus meos sendra, de suo part **non** lostanit, si io retornar **non** l'int pois, ne io ne neuls cui eo retornar int pois, in nulla aiudha contra Lodhuuig **nun** li iu er.

「もしルードヴィッヒが、その弟シャルルに誓った誓約を守っているのに、私の主君シャルルのほうが、それを守らない場合、私がシャルルに思い止まらせることができないときは、私にせよ、私が思い止まらせることのできる人は誰でも、ルードヴィッヒに敵対して、シャルルにとってどんな助けとなる立場にも立つことはないであろう。」

最初期のフランス語は古典ラテン語の **non** 形を継承していたと思われるが、この『ストラスブールの誓約』は、言語資料としての取り扱いに問題の残るテキストである。³ このテキストから 40~50 年後に書かれた作品に、『聖ウーラリの続唱』がある。

『聖ウーラリの続唱 *Séquence de Sainte Eulalie*』(880 年頃)

Elle **no**'nt eskoltet les mals conselliers, (5)

「彼女は悪の忠告者に耳をかさない、」

Niule cose **non** la pouret omque pleier / La polle sempre **non** amast lo Deo menestier. (9-10)

「何もものをもってしても彼女の心を曲げ、生娘が神へのお仕えをものはや好まなくなるようにすることはできなかった。」

Elle colpes **non** auret, por o **nos** coist. (20)

「彼女に罪はなかった、そのため身体は焼けなかった。」

La domnizelle celle kose **non** contredist: (23)

「乙女はそのことに抵抗しなかった。」 () 内は行番号

³ 川口 (2000) pp.10-11 を参照。特にラテン語の法令文書から幾つかの紋切り型の表現が引用されている。Konrad EWALD (1964) "Formelhafte Wendungen in den Strassburger Eiden", *Vox Romanica* 23, 35-55 を参照のこと。

僅か 29 行のテキストの中に **non** 形とともに、**no** 形が現れる。5 行目の **no'int** は、ラテン語の **non intus** に由来する。20 行目の **nos** 形は、読みの問題があるものの、否定辞と 3 人称再帰代名詞の直接目的語 **se** が合体した形態と考えられる。いずれも写字生が **no** と綴っていることから、**no** が **non** の変異形なのか、あるいは独立した **no** という形態なのか意見の分かれるところである。しかしながら、この 2 つの例では、無アクセント要素 (**int** と **se**) と合体した場合にだけ **no** 形が現れており、かつ **o** の綴り字がしばしば **e** と同じような音価を表していたと思われる例、たとえば **lo = le** や **czo = ce** があるため、『聖ウーラリの続唱』の **no** 形は、**non** 形の無アクセントの変異形が、しだいに否定辞の **ne** として文法化していく過渡的状态を表していると言えるであろう。

この『聖ウーラリの続唱』からさらに 40~50 年後に作成されたと推測される作品に『ヨナについての説教』がある。この作品は聖書のヨナ書に関する聖ヒエローニムスの注釈を元にして、民衆に説教をしようとした聖職者の残した備忘録と考えられ、ラテン語と古フランス語が入り交ざった貴重な資料である。ところが残念なことに、写本の状態が劣悪であり、判読可能なのは 115-226 行である。⁴

『ヨナについての説教 *Sermon sur Jonas*』(10 世紀前半)

---- **ne** fait et fu (37)

Co astreiet ruina Iudeorum. E **ne** doleiet <tant ----- de l>ur salut. (126-127)

Se Ninive destruite> astreiet u **ne** fereiet. (139-140)

「(神が) ニネヴェを破壊されるか否かを」

E jo **ne** dolreie de tanta milia hominum si per dixit erent dixit? (181-182)

「私はたくさんの人々のことを嘆かないでおられようか・・・」() 内は行番号

『ヨナについての説教』では **ne** 形だけが現れ、しかも無アクセント要素を伴っているのではなく、いずれも **ne** だけが動詞の直前に来る。『聖ウーラリの続唱』から僅か 40~50 年の間に、**ne** の文法化がこうして成立したとは考えにくく、むしろこの **ne** 形は『ヨナについての説教』の言語特徴と考えたいところであるが、いずれにしても 10 世紀前半に **ne** 形が否定辞として使用されていたことは疑いようのない事実と思われる。

ところで、古フランス語期に **ne** 形が文法化し、**non** 形が **ne** 形に規則的に置き換わったと短絡的に考えるのは誤っている。中期フランス語の時代を通じて、少なくとも 16-17 世紀に至るまで、**non** 形は一部の動詞表現や不定詞とともに存続し続けた。以下は全て MARTIN et WILMET (1980) からの引用である。

- Et ne vueil point tenir leur loy - Père Taré, **non** fais je, moy.; (Viel Testament, I)

- Feray. Et ! par Dieu ! **non** feray (Pathelin, 318)

Laissez moy, laissez, je suis mort. - **Non** estes, non, ... (Cent Nouvelles, 63.109)

⁴ 川口 (2000) pp.12-13 を参照。

... que je voudroye **non** estre né, ... (Chastellain, 55)

ところで古フランス語期における **ne** 形の文法化とはどのようなものであったのだろうか。興味深いことに、無アクセント形の **ne** が定着するのと同じ時期に、**ne** だけを用いる単純な否定形（以下、単純形と称する）は、**ne ... pas, ne... point, ne... mie, ne... goutte** のような否定を補完する様々な不変化辞を伴った複合的な否定形（以下、複合形と称する）と競合するようになった。

Corpus de la littérature médiévale（Champion Electronique, 2001）に収蔵される2つの作品を分析した武次（2005）によれば、古フランス語の盛期に執筆されたと考えられる2つの韻文作品、Aliscans（1150-1200年頃）とEneas（1160年頃）で以下のような結果が得られた。

Aliscans	直説法	接続法	条件法	命令法	不定法	計
単純形	527	94	28	14	0	663
%	79.5	14.2	4.2	2.1	0	84.9
複合形	101	5	0	11	1	118
%	85.6	4.2	0	9.3	0.8	15.1

Eneas	直説法	接続法	条件法	命令法	不定法	計
単純形	620	105	18	10	6	759
%	81.7	13.8	2.4	1.3	0.8	77.0
複合形	198	10	10	8	1	227
%	87.2	4.4	4.4	3.5	0.4	23.0

（統計は単純形の **ne**、複合形の **ne...pas, ne...mie, ne...point** が能動文で用いられた場合で、等位接続詞の **ne, ne...onques, ne...ja**、名詞として使用された **pas, mie, point** は除外された。）

Aliscans と Eneas では、いずれも8割強から弱が単純形であり、複合形はまだ一般的ではなく、複合形が文法化しているとは言えない状態にあった。これは MARCELLO-NIZIA (1997) の以下の記述と合致する。

「ところで、中期フランス語を特徴づけるのは、**ne**+副詞が動詞活用形の前で、全体否定の最も一般的なしるしになっていくという事実である。実際、14世紀初頭にこの変化の現われを私たちは見る。(…)『アンリ・ドゥ・モンドゥヴィルの外科学』では、208の全体否定について、GARDNER and GREENE (1958) は115の**ne**+副詞、93の単独の**ne**を見つけた。他のテキストもこの進化を証明している。『結婚十五の喜び』では20ページ中に、26の**ne**+副詞に対して、17の**ne**があった。(…)歴史家コミーヌの『随想録』では、245の**ne**+副詞に対して182の**ne**があった。しかし15世紀末においても、まだ**ne**が優勢であったことからこの分析はさらに洗練されねばならない。

たとえば『パトラン先生』で 94 の *ne* に対して、66 の *ne*+副詞があり、(...)『ジャン・ドゥ・パリの小説』では 119 の *ne* に対して、79 の *ne*+副詞があった。」⁵

このように単純形と複合形は長きに渡って競合していたようであり、無アクセントの否定辞 *ne* の形態的脆弱性を補うかのように、不変化の否定辞 *pas*, *mie*, *point* などが用いられるようになったことは注目に値する。では、何ゆえ複合形が定着するのにかくも長い時間を要したのであろうか。

原因の 1 つは、複合形に地域的変異があったためと考えられる。PRICE (1997) の調査によると、*ne...pas* 型の複合形は中央部と西部に特徴的であり、*ne...mie* 型は北部と東部に特徴的な否定形であるという。

	<i>pas</i>	<i>mie</i>	<i>point</i>	計
1 <i>Roman de Thèbes</i>	83	16	1	100
2 <i>Guernes de Pont-Sainte-Maxence,</i> <i>Vie de Saint Thomas Becket</i>	92	6	2	100
3 Jean de Meun, <i>Roman de la Rose</i>	81	14	5	100
4 Robert de Clari, <i>Conquête de Constantinople</i>	-	115	-	115
5 <i>Chronique d'Ernoul</i>	9	89	2	100

(各作品の最初の 100 例の調査。PRICE (1997) p.176)

確かに 1~3 の作品には複合形 *ne...pas* が多く見られる。これらはいずれも中央部および西部で執筆された作品である。他方、ピカルディー地方やロレーヌ地方で執筆された 4 と 5 の作品には *ne...mie* が多い。

STEWART (1997) はさらに一歩進んで、複合形の *ne...mie* は、すでに 12 世紀から北部のワロン地方で規範となっていたと主張する。12 世紀のワロン地方の文語に規範があったという考え方に筆者は賛同しかねるが、それは写本の読みの異同からも明らかである。たとえばファブリオーの名作の 1 つ、『オーブレ *Auberee*』を取り上げてみよう。この作品は 7 写本 (下表の ABCDEFJ) と 1 断片に伝わっているが、否定形の読みには以下のような異同が見られる。

⁵ Mais, ce qui caractérise le moyen français est le fait que très vite *ne* + *adverbe* va devenir la marque la plus courante de la négation totale devant verbe conjugué. Nous voyons en effet apparaître ce changement dès le début du XIV^e siècle, (...) CHM: sur 208 négations totales, *G et G* ont relevé 115 *ne* + *adverbe* contre 93 *ne* seul; d'autres textes témoignent de cette évolution: QJM (sur 20 pages, 26 *ne* + *adverbe* contre 17 *ne*), (...) Commynes (245 *ne* + *adverbe* contre 182 *ne*); mais le fait que *ne* domine encore à la fin du XV^e siècle, dans Pathelin (94 *ne* contre 66 *ne* + *adverbe*), (...) JP (119 *ne* contre 79 *ne* + *adverbe*) invite à affiner l'analyse. MARCHELLO-NIZIA (1997) p.302

ne...pas	ne...mie
1. Ele n'est pas de ton afere (A38) Ele n'est pas de ton afere (B38) Ele n'est pas de ton afere (C40) Cele n'est pas de ton affaire (D38) Elle n'est pas de ton affaire (E38) Qu'ele n'est pas de vostre affaire (F40) Ele n'est pas de ton affaire (J38) 「彼女にはお前ほどの身分はない」	
2. Mes n'en est pas encor deliures (A128) Mes encore n'est pas deliures (C133) Encor n'est il pas deliuvres (E126) Mais il n'est pas del tout deliures (F148) 「しかし彼はすっかり自由になったのではなく」	Mes il n'est mie toz deliures (B128) Mais il n'est mie tost deliures (D130) Mais il n'est mie tous deliures (J134)
3. <i>Que</i> li sires n'ert pas laienz (B143) <i>Que</i> li sire n'iert pas laiens (C148) <i>Que</i> li sires n'ert pas laienz (D145) <i>Que</i> li sires n'iert pas laiens (E141) <i>Que</i> li bourgeois n'ert pas laiens (F163) <i>Que</i> li sire n'est pas laiens (J148) 「町人が留守だということ」	
4. Ne lessa pas la chambre ouuerte (A308) Ne lessa pas la chanbre ouerte (B318) Ne laisse pas la chambre ouuerte (D315) Ne laissa pas la chambre ouerte (E312) Ne laissa pas la cambre ouuerte (J294) 「部屋を開けっ放しにはせず」	
	5. <i>Qu'i</i> ne m'en fust ore mestiers (C597) JI ne m'estoit or nus mestiers (D593) JI ne m'et or mie mestiers (E574) JI ne me fust mie mestier (F680) JI n'est ore mie mestiers (J501) 「いわれはなかった」
6. N'eust il pas ioie greignor (A589) N'eust il pas ioie greignor (C639) N'eust il pas ioie graignor (D638) N'eust il pas ioie grignor (E611) N'euist pas ioie grignor (F735) N'euist il pas ioie grignor (J516) 「この以上の喜びはなかったでしょう」	

(())内は写本略号と行番号を表す。脚韻位置は除外した。写本の読みがない場合は、読みが全く異なるか、対応する部分がないことを意味する。

2の行を見ると、pas と mie の写本群に分かれる。mie の地理的分布に従えば、写本 B D J が北部で、写本 A C E F は中央部ということになってしまうが、1, 3, 4, 6を見ると写本は全て pas の読みを採用し、5ではmieの読みしかない。こうした読みの異同が pas と mie の地理的な分布だけで説明できるとはとても考えられない。おそらくmieを用いる地域においても pas は許容されたことが想像される。mie が北部や東部に多く見られるというのは、その地域で好んで用いられる傾向があったという意味であろう。

単純形から複合形への歴史的推移、すなわち ne+不変化辞の文法化は、こうした地理的変異の存在により、単純形から複合形への単純な推移だけでなく、後にみるように ne...pas と ne...mie の対立が ne...pas と ne...point への対立へと推移し、最終的に ne...pas に一元化するまで長い時間を要することになった。

さらに複合形の定着には、OV(S) 構造から SVO 構造への進化も関係している。今田(2002)によれば、古フランス語の否定文は、一般に OSV 構造をとることが多いという。⁶後に OV(S) 構造と OSV 構造で、O が移動し、最終的に両者は SVO 構造に一元化するわけだが、SVO 構造の定着によって、肯定文と否定文が同一の語順をもつに至った結果、両者の区別をより明確化するために、単純形ではなく、より弁別性の高い複合形が否定の標識として定着したのではないかと推測される。ただし、こうした仮説には綿密なコーパス分析による裏づけが必要とされるが、ここではその分析を行うだけの余裕はない。

2. 中期フランス語期

中期フランス語の2つの作品について、次のような分析結果がある。

	単純形	複合形 (ne...pas, point, mie)
<i>Joinville</i>	433 (68.7%)	197 (31.3%)
<i>Bérinus</i>	1239 (73.0%)	457 (27.0%)

古フランス語盛期の Aliscans や Eneas に比べると、確かに単純形が後退し、複合形の割合が増加していると言えよう。とはいうものの複合形が文法化したと言うには程遠い状態であった。多くの研究者は ne...pas 形が中期フランス語の時期に定着したと主張しているが、文献学的に立証できる言語状態は、必ずしもそのことを裏付けていない。しかしながら、次のように言うことはできるであろう。

比較的頻繁に観察される複合形は、もともと ne...pas, ne...point, ne...mie の3種類しかなく、古フランス語期においては、既述のように、このうちの ne...pas と ne...mie が地理的に相補分布をなしていた。中期フランス語になると、3つの変種の中の ne...pas が他よりも優勢になり、ne...mie は衰退して脚韻においてのみ残存し、それに代わって次第に ne...point が台頭するようになった。以下の表はそうした変化の傾向を示している。

⁶ 今田(2002) p.191 以下の第11章を参照。

テキスト	作成年	ne...pas	ne...point	ne...mie
Joinville, <i>Vie de Saint Louis</i>	1309	156	22	19
<i>La Chirurgie de Maître Henri de Mondeville</i>	写本 1314	110	5	-
<i>L'Estoire de Griseldis</i>	1395	19	5	9 (脚韻 8)
<i>Le Quadriologue invectif</i>	1422	28	2	2
François Villon, <i>Le Testament</i>	1456-63	支配的		
<i>Maistre Pierre Pathelin</i>	1464	43	17	6 (脚韻 5)
<i>Le Franc archier de Baignollet</i>	1468-80	9	7	-
<i>Le Roman de Jehan de Paris</i>	1494-95	50	29	-

(MARCHELLO-NIZIA (1997) p.304 の図表を適宜修正したもの。)

ne...point が古フランス語と中期フランス語を通じて他の否定形に比べて頻度が低いのは、いわゆる point de + 名詞の否定が一般的であったことによる。PRICE (1997) は副詞的な point が拡大したのは 15 世紀から 16 世紀にかけてであったとし、1549 年に Joachim DU BELLAY の出版した *Défense et illustration de la langue française* では、ne...pas が 14 回に対して、ne...point は 56 回現われ、両者の勢力関係が逆転していると指摘した。確かに PRICE (1997) p.175 の表を見ると、16 世紀において ne...point の頻度が上昇していることがわかるが、忘れてならないのは、ne...pas と ne...point の葛藤の陰で、残存し続けている ne だけを伴う単純形である。今日でも助動詞 pouvoir, vouloir などでは単純形が用いられる。NEUMANN (1959) は 15・16 世紀のテキストを資料体として、助動詞とともに使用された単純形と複合形の競合を調べているが、その結論は以下のようなものであった。

単純形を優先する要因

- 1) 文学的, ラテン語法, 保守的な文体
- 2) ひとまとまりの語法を壊さず, 2つのアクセント音節の連続を回避するため

複合形を優先する要因

- 1) 民衆的, 話しことばに近い文体
- 2) 否定の強調

一方、NEUMANN が掲げる表のうち、特に vouloir, 不定詞, 命令法とともに用いられる場合を見てみると、明らかに Heptaméron や Le grand Parangon のような作品で複合形が定着している。

複合形の定着しはじめた 16 世紀以降の時代が、それ以前の時代と大きく異なっているのは、文法家たちの登場により、文法事項について多数の貴重なメタ言語情報が得られるようになったことであろう。否定形もその例外ではない。多くの文法家が否定形について書き残している。

3. 文法家によるメタ言語情報

1530年、フランス人に先んじてフランス語文法を著したのはイギリス人 John PALSgrave であった。その著 *L'Éclaircissement de la langue française* の記述はたいへん興味深い。否定形の言及が最初に出てくるのは、第2書 (The Second Boke) の46葉である。

(...) for in maner there is no verbe that hath *ne* afore hym, but he must have eyther *pas*, *poynt*, or *mye* after hym. ⁷ (The Second Boke, f.46)

「(...) 実際のところ *ne* に先立たれ、*pas*, *poynt*, *mye* が後続しないような動詞は存在しない。」

このように PALSgrave は、複合形が原則であると述べておきながら、第3書の「動詞について Of the Verb」の132葉で、もっと微妙な説明を行っている。

(...) So that *pas*, *poynt*, or *mye* be used for a more clere expressing of negacion, and as though the speker wolde byde by the thing hiche be denyeth: in so moche that, if the speker do but fayntly denye a thyng, they use than to leave out *pas*, *poynt*, or *mye*... (The Second Boke, f.132)

「(...) 従って、*pas*, *poynt*, *mye* はより明確に否定を表現するのに役立つ、あたかも話し手がしかじかのことはしないという事実を強調するかのようなようである。実際、フランス人は否定を弱く表現したいとき、*pas*, *poynt*, *mye* を省略する傾向がある。」

否定を明確に、強く表すために複合形を用いるというのである。しかし次のように付け加えている。

And note that betwene *pas* and *poynt* is no maner difference, but it is in the spekers or writtars election whether he wyll use the one or the other, but as for *mye* is an olde Rommant worde and nowe out of use where the ryght frenche is spoken. (The Second Boke, f.46)

「そして *pas* と *poynt* の間にはいかなる意味の違いもなく、どちらを用いるかは話し手あるいは書き手の選択にある。一方、*mye* は古いピカルディーの語であり、正しいフランス語が話されているところでは現在用いられないことに注意するように。」⁸

pas と *point* が競合していたのに対して、*mie* が古形であったことを雄弁に物語る一節である。

PALSgrave が一歩先んじたフランス語文法の出版競争であったが、翌年には Jacques

⁷ 原文は若干の例外 (装飾文字や *ſ* (=s) など) を除いてできる限り当時の綴り字に従った。以下も同様。

⁸ 中期フランス語期に執筆された綴り字の指南書 *Tractatus Orthographiae T.H. Parisii Studentis* の中で、Romanic がピカルディーやワロンを指すが、この箇所の *Rommant* もこれと同じ意味であろう。Douglas A. KIBBEE, *For to speke Frenche trewely. The French language in England, 1000-1600: its status, description and instruction*, 1991, Amsterdam/Philadelphia, p.50 も参照。

DUBOIS こと SYLVIUS によって、フランス側の攻勢が始まる。ラテン語で執筆された *Iacobi Syluii Ambiani in linguam Gallicam Isagoge, una cum eiusdem Grammatica Latino-gallica, ex Hebraeis, Graecis et Latinis authoribus* (1531) の中には、否定形について次のような記述がある。

31. Auxesis negationis.

Passus pas. Punctus point. (...)

Haec sermoni vernaculo addimus ad maiorem negationem, vt il n'i est pas, vel point, ab ille non ibi est, tantá dicas, illius ne passus quidem seu vestigiú vel punctum ibi est. (...)

「31.否定の付加。

Passus から pas が、Punctus から point が (由来する) (...)

より強い否定のために、私たちは上記の単語を土語に付加する。たとえば、「そこに彼はいない (non ibi est)」という意味で、il n'i est pas あるいは point というであろう。そこに彼の足跡あるいは痕跡や点はないと言うように。(...)」

SYLVIUS はこの説明の後に、grain や goutte の不変化辞は穀物や液体に用いられ、pas や point が他よりも一般的であると述べているが、mie への言及はない。この 31 章のタイトル、「否定の付加 Auxesis negationis」からも、不変化辞は否定を強調するために用いられると著者が考えていたことがよくわかる。

SYLVIUS の 20 年後、今度は Louis MEIGRET がフランス人として初めてフランス語でフランス語文法を執筆した。*Le Tretté de la Gramèze Françøeze* (1550) の中で、MEIGRET は、それまでの文法家とは異なる視点から否定を考察した。

«(...) denotet vehemence: comme tant, fort, par trop, bien, toutallement, point, pas: Ny ne sey pourqøe infiniz de no' Françøes rebuttet çø' deu' derniers, lès çestimans superflus en notre lange. (p.174, NEUMANN (1959) p.188 からの引用)

「(...) tant, fort, par trop, bien, toutallement, point, pas は感情の激しさを表わす。我々の言語では余剰的なものと評価し、多くのフランス人がこの最後の 2 つ (point と pas) に嫌悪感を抱く理由が私にはわからない。」

MEIGRET は pas や point に嫌悪感を抱く理由がわからないとし、むしろこの不変化辞を用いる複合形を弁護している。逆に単純形に対しては、「冷たい言い方 façons de parler qi se troueroét bien froèdes」とマイナスの評価を下している。⁹ さらに不変化辞は「感情の激しさを表す denotet vehemence」とし、否定を強調するための手段と考えていた。MEIGRET は単純形が無標で、複合形が強調を表す有標とする PALSgrave や SYLVIUS の考えに修正を加えた。すなわち単純形はもはや無標でなく、「冷たい言い方」を表わし文体的に有標である。

⁹ façon de parler bien «froèdes」という MEIGRET の表現が、はたして NEUMANN の主張するように「本のような雰囲気 un air livresque」の意味なのかどうか、*Le Tretté* の記述からは判然としない。NEUMANN (1959) p.189 参照。

MEIGRET の解説は、伝統的な *ne* による無標の否定と *ne...pas* あるいは *ne...point* による有標の否定の間に、既に変化が生じていたことを物語る。

文法家 Antoine CAUCHIE は *Grammaire française* (1586) の中で、否定形について次のように述べている。

Secundariæ negationes sunt *pas*, *point*, & *mie*, quæ cæteris ratiō est nec quasuis orationes ingreditur. Secundarias uoco, quia alia consueuit uerbo præponi, quod harum una sequitur, ut *je ne parle point aut pas de vous: Aussi ne parloi-je mie de lui.* (p.80)

「二次的否定形は *pas*, *point* と *mie* である。これらは他よりも規則的であり、どのような発話にでも入るわけではない。私がこれらを二次的と呼ぶのは、それらの1つが後続する動詞の前に、もう1つ別の否定辞が先行するからである。たとえば *je ne parle point* あるいは *pas de vous. Aussi ne parloi-je mie de lui.* のようにである。

さらにこうも付け加えている。

Pas & point uniuersè negantes particulæ uidentur quantitatem includere. (ibid.)

「*Pas* と *point* の否定辞には一般に量が含意されるように思える。」

CAUCHIE は否定形に一次的と二次的を区別し、単純形が前者で複合形が二次的な小辞を伴う否定形と考えている。16世紀の段階においても、まだ不変化辞の *pas* と *point* が二次的と捉えられていたことは興味深い。複合形の文法化はまだ達成されていなかったと考えられる。

4. 古典フランス語から現代フランス語まで

Charles MAUPAS は *Grammaire et syntaxe française* (1618) の中で、*ne* と *non* の使用について次のように区別している。動詞や目的語をもつ分詞の前では、発話の連続において (*en fil de discours*) 動詞より前に *ne* を先行させる。一方、*faire*, *avoir*, *estre*, *faloir*, *vouloir* を用いて、絶対否定形 (*negative absolue*) で答えるには *non* を用いなければならない。Dites-moy vostre nom. Non feray. 「あなたの名前を私に言ってください。いいえ言えません。」¹⁰

先にも述べたように、この古い否定辞 *non* を用いた言い方は17世紀においても存続し続けた。さらに *pas* と *point* の違いを MAUPAS は次のように述べている。

Pas & point, ne sont que remplissage de negation. Et ne différent gueres, *Point* convient

¹⁰ (...)Et devant les verbes, ou tels participes ayans regime de verbes, nous employons *Ne*, l'office de laquelle est de preceder le verbe en fil de discours, quand la negation tombe sur luy. Exemple des deux. *Je suis venu en France, non afin de passer inutilement mon temps, mais pour apparendre la langue Française. Je ne suis pas venu pour perdre le temps.*(...) Et marquez la condition, *en fil de discours*. Car autrement en response negative absolue par ces verbes, *Faire, Avoir, Estre, Faloir, Vouloir*, aux conditions cy devant montrees, il faut employer *Non*. Dites-moy vostre nom. Non feray. (f.166 verso)

mieux aux choses portans quantité. *Je n'ay point d'argent, (...)* Et nous sert souvent de negation absoluë. *Pas*, clost la negation simple, ou de qualité. Et ne nous sert jamais de negation absoluë, hormis ce dernier point, on les confond souvent. (167 verso)

「Pas と point は否定の埋め草にすぎない。両者はほとんど違っていないが、point は量に関係するものに適合する。「私はお金が少しもない。」(...) しばしば絶対否定形として用いられる。Pas は単純否定形、あるいは質の否定を閉じる。絶対否定形として用いられることは決してない。この最後の点を除くと、両者はしばしば混同される。」

MAUPAS の解説を見ても、やはり pas と point は埋め草であり、二次的な否定辞であるという意識を読み取ることができる。

Antoine OUDIN も MAUPAS と同様に、まず non と ne の違いを説明し、続いて pas と point について言及している。しかしその説明は 1632 年の初版 *Grammaire françoise rapportée au langage du temps* と 1640 年の改訂増補版 *Grammaire françoise rapportée au langage du temps reveuë et augmentée de beaucoup en cette seconde édition* で微妙に内容が異なる。違っている箇所を下線を引いて両者を比較してみよう。

Beaucoup de personnes confondent *pas & point*, mais il y a pourtant de la difference, car *point* se rapporte aux choses qui portent quantité: Par exemple: (...) Et cependant on met souvent l'vn pour l'autre. (1632 年版 p.290)

「多くの人が pas と point を混同するが、そこには違いがある。point は量に関係するものに用いられる。たとえば (...) しかし両者はしばしば入れ替えが可能である。」

Beaucoup de personnes confondent *pas & point*, mais il y a pourtant de la difference, car *point* se rapporte aux choses qui portent quantité, & *pas* conclud vne negation simple, ou de qualité: par exemple: (...) & cependant on met souvent l'vn pour l'autre.

Voicy vn exemple assez sensible de leur difference. *Ne m'avez-vous pas dit*, est vne espece d'affirmation, pour assurer que l'on nous a dit vne chose, & *ne m'avez-vous point dit*, vne interrogation pour sçavoir si l'on nous a dit, &c. Outre que *point* mis pour *pas*, a quelque force particuliere de *non omnino*; *ne voulez-vous pas faire cela*; *point du tout*. Et sert plus proprement à respondre à l'interrogation. Vous en iugerez clairement la difference par ces deux phrases, *N'avez-vous pas receu des lettres*, & *n'avez-vous point receu de lettres*: dont la premiere est vne simple interrogation negatiue, & l'autre porte vne priuation. Et de plus l'interrogation simple est d'vne chose passée que l'on tesmoigne sçavoir, & l'autre est d'vne chose douteuse, de sorte qu'en ce cas on ne les peut confondre aucunement. (1640 年版 p.289)

「多くの人が pas と point を混同するが、そこには違いがある。point は量に関係するものに用いられる。そして pas は単純否定形あるいは質的な否定を閉じる。たとえば (...) しかし両者はしばしば入れ替えが可能である。」

次は両者の著しい相違の例である。Ne m'avez-vous pas dit は、ある事柄が言われたことを確認する、一種の断定である。一方、ne m'avez-vous point dit は、言われたかどうかを知るための疑問である。さらに pas の代わりに置かれた point には、ne voulez-vous pas faire cela; point du tout のように、全体否定形を表す特別の力がある。そして疑問に対してより適切に答えるのに役立つ。次の例から違いが明確に判断できよう。N'avez-vous pas reçu des lettres と n'avez-vous point reçu de lettres を比較。前者は単純な否定疑問であるが、後者は欠如 (privation) を表す。さらに前者の単純疑問は、証明が可能な過去の事柄に属するが、後者は疑わしい事柄に属する。結果として、その場合に両者が混同されることはない。」

OUDIN によれば、pas が単純な否定を表し、真偽が問題となるのに対して、point は疑いを伴った否定を意味する。両者がこうした違いをもつ場合には混同されることがないという。

とはいうものの pas と point の違いは、当時の文法家でさえ、説明が困難なものであった。フランス語の規範形成とその後の文法研究に大きな影響を与えた Claude Favre de VAUGELAS は、1647 年に出版された *Remarques sur la langue françoise* の中で、pas と point が使用されない幾つかの文脈を説明した後に、次のように述べている。

Au reste il est tres-difficile de donner des reigles pour sçavoir quand il faut plustost dire *pas*, que *point*, il le faut apprendre de l'Vsage, & se souuenir que *point* nie bien plus fortement que *pas*.

「上記以外の場合、どのような時に point ではなく pas を言わなければならないのかを知るための規則を作ることはたいへん難しい。慣用を学び、また point は pas よりも強く否定することを覚えておく必要がある。」

ところで PRICE (1997) の資料によれば、ne...pas と ne...point の競合に終止符が打たれるのは、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのようである。下表を参照。

テキスト (出版年)	pas	point
Descartes, <i>Discours</i> (1637)	68	32
Vaugelas, <i>Remarques</i> (1647)	87	13
Pascal, <i>Provinciales</i> (1656)	86	14
Montesquieu, <i>Lettres persanes</i> (1721)	74	26
Voltaire, <i>L'Ingénu</i> (1767)	86	14
Bernard de Saint Pierre, <i>Paul et Virginie</i> (1788)	80	20
Constant, <i>Adolphe</i> (1816)	86	14
Stendhal, <i>Le Rouge et le Noir</i> (1830)	89	11
Zola, <i>La Fortune des Rougon</i> (1871)	96	4
Proust, <i>Du côté de chez Swann</i> (1913)	100	-

Mauriac, <i>Thérèse Desqueyroux</i> (1927)	99	1
Camus, <i>L'Étranger</i> (1942)	100	-

(テキスト名は省略形で、統計は最初の 100 例を調べたもの。PRICE (1997) p.181)

最も厳密な見方をするならば、ne...pas と ne...point の競合が解消された段階、すなわち 18 世紀末から 19 世紀初頭をもって、現代フランス語における ne...pas の文法化が完了したと考えることが可能であろう。

5. 規範的否定形とそこからあふれ出た否定形

17 世紀の文法家たちの記述を読んでもと、驚くほど同じような記述に出会う。それは文法書の間テキスト性に依るところが大きいであろうが、同時にこの時期に現代フランス語の文法規範が醸成されていったことが手に取るようにわかる。AYRES-BENNETT (1994) は、否定形の通時的推移を分析する上で 17 世紀が重要な時期であると主張した。17 世紀がフランス語のコード化、標準化にとって鍵となる時期だったからである。17 世紀はまた、コード化と標準化の影で、多くの変異形が消えて行った時期でもあった。

non+不定詞は、この時期を通じて標準的なフランス語から消えた。興味深いことに、UDIN は 1632 年の初版では何も触れていないのだが、1640 年の改訂増補版では、次のような説明を付け加えたのだった。

Quelquefois les negatives, *ne & pas*, se mettent ensemble & principalement deuant l'infinif: v.g. *pour ne pas donner à connoistre*: ou bien on y met le pronom personnel entre deux, *pour ne vous pas*, &c.

「幾つかの否定辞 *ne* と *pas* は、ともに主として不定詞の前に置かれる。例 *pour ne pas donner à connoistre*。あるいは 2 つの間に人称代名詞を置く。*pour ne vous pas* のように。」(1640 年版 p.287)

一方では規範化と標準化が進むにつれて、規範からあふれ出るものの姿が少しずつ明らかになってきた。否定形の場合、規範からあふれ出したのは、CAUCHIE が言うところの一次的な否定辞 *ne* が脱落し、二次的な否定辞 *pas* あるいは *point* だけからなる否定形であった。

PRICE (1978) の例によれば、規範からあふれ出たこの否定形の最古の例は、13 世紀に書かれた『バラ物語 *Roman de la Rose*』であるという。

Sez tu pas qu'il ne s'ensuit mie, / se lessier veill une folie,
que fere doie autele ou graindre ? (v.5699-5701)

「ひとつの狂気を放棄したとしても、だからといって同じくらい、あるいはより大きな狂気に走らなければならないということには結びつかない、こんなことがわからない

のですか。」(Éd. Félix Lecoy, 『薔薇物語』, 篠田勝英訳, 平凡社, 1996, p.139)

Met, s'il te plest, en moi t'entente. / **Sui je pas** bele dame et gente,
digne de servir un preudome, / et fust enpereres de Rome ? (v.5767-5770)

「どうかわたしに注意を向けてください。わたしは立派な男性に、たとえローマ皇帝に
さえも仕えるのにふさわしく、美しい高貴な女性ではありませんか。」(同上 p.141)

«Qu'est ce, dist il, sui je tanzet ? / **Veille je pas ?** Nenin, ainz songe. (v.21114-21115)

「「いったいこれはどうしたことだ」と彼は言った。「試されているのだろうか。わたし
は目を覚ましているのだろうか。いや、そんなはずはない、夢を見ているんだ。」(同
上 p.486)

写本の異同においても、この部分に他の読みはないようである。いずれも疑問文で現れる
点が注目される。その後、この否定形は長らくフランス語史の幕裏に隠れ潜んでいたのだ
が、17世紀になるや歴史の表舞台に登場し、この用法をめぐる文法家たちが口泡激しく
議論することになった。たとえば VAUGELAS は、この否定形のために1節を割いている。

N'ont ils pas fait, & ont-ils pas fait.

Tous deux sont bons pour exprimer la mesme chose; Car comme nostre langue aime les
negatiues, il y en a qui croient que l'on ne peut pas dire, *ont-ils pas fait*, & & qu'il faut
tousjours mettre la negatiue *ne* deuant, & dire, *n'ont-ils pas fait*. Mais ils se trompent, & il est
d'ordinaire plus elegant de ne la pas mettre. Depuis, m'en estant plus particulierement informé
de diuerses personnes tres-sçauantes en nostre langue, ie les ay trouué partagées: Tous
conuiennent que l'vn & l'autre est bon, mais le partage est en ce que les vns le tiennent plus
elegant sans la negatiue, & les autres avec la negatiue. (p.210)

「N'ont ils pas fait と ont-ils pas fait はいずれも正しく、同じことを表す。フランス語は
否定形を好むために ont-ils pas fait と言うことはできない、ne を前に置いて n'ont-ils pas
fait とするべきだと考える人がいる。しかし彼らは間違っている。ne を置かないほう
がエレガントなのだ。その後、様々なフランス語学者たちから特に意見を聞いたとこ
ろ、彼らの見解が分かれていると思った。それぞれ正しいというには一理ある。しか
し意見は2分されており、片方は否定がない形を、もう一方は否定がある方をエレガ
ントだと主張する。」

文法家の Gilles MENAGE は *Observations sur la langue françoise* (1675-76) の中で、この
VAUGELAS の主張を次のように批判した。

Monsieur de Vaugelas veut qu'il soit mieux de dire, *Ont-ils pas fait?* sans la négative, que
N'ont ils pas fait? avecque la négative. Je ne suis pas de son avis. *N'ont-ils pas fait?* me

semble plus élégant. (...) (Chapitre LVII, p.383)

「ヴォージュラ氏は否定辞のある *N'ont ils pas fait?* よりも、否定辞のない *Ont-ils pas fait?* という方が望ましいと考える。私は彼の意見には組しない。*N'ont-ils pas fait?*の方がエレガントだ。(…)」

この MENAGE と同じ見解を後にアカデミーフランセーズもとったため、VAUGELAS の提唱する *ne* のない否定形は、規範として採用されることがなかった。それ以前にも MAUPAS がこの規範を逸脱する否定形について触れたが、あくまでも外国人における誤用の例としてであった。

Les estrangers font souuent ce solœcisme en nostre langue d'obmettre la negatiue *Ne*, quand leur propos contient l'un desdits termes negatifs en apparence; Disans. *I'ay rien fait, I'ay iamais entendu cecy*, où il faut dire, *Je n'ay rien fait, Je n'ay iamais*, &c. (...) (p.168)

「言葉の中に、上記の否定語の 1 つが含まれるとき、外国人はしばしばフランス語の破格形を用いて、*ne* を省略する。*Je n'ai rien fait, Je n'ai jamais entendu ceci* と言うべきところ、*J'ai rien fait, J'ai jamais entendu ceci* と言う。」

文法家によって外国人の使用する誤法例と決めつけられた否定形であったが、PRICE によれば、少なくとも 15 世紀からフランス語では恒常的に見られたと言う。この *ne* を脱落させる否定形は、重要な文献の存在によって、17 世紀に疑いなく用いられていたことが証明されている。

その文献とは、1601 年から 1628 年までルイ 13 世（在位 1610-43 年）に仕えていた医師 Jean HÉROARD の残した手記である。手記によると、1601 年生まれの王子は、幼少の頃、*je veu pa* や *je sui pa beau* の否定形を頻繁に用いていた。ただしこの文献をさらに詳細に分析した博士論文によれば、1605 年には *ne...point* 形であったのが、1607 年には *point* だけの否定形になり、1608 年から 1610 年にかけては *ne* の脱落は約半数にまで増加したという。このことから *ne* のない否定形は、子ども言葉の特徴であるとする学者もいる。いずれにせよ、規範からあふれ出した否定形であるがゆえに、書記言語にこの否定形が頻繁に現れなかったことは当然のことである。

結論

最後に本稿の内容をまとめておく。ここでは活用動詞を否定する場合だけを扱った。不定詞の否定などは考慮していない。本研究の内容を総括すると、出発点となった ASHBY (1991) の表は以下のように書き改められるべきであろう。

通時的観点からみたフランス語の否定辞

世紀	支配的否定形	非支配的否定形
IX 以前	non...	
IX・X	no (=ne)...	non
XI-XIII	ne...	ne...pas \longleftrightarrow ne...mie, ne...point, ne...goutte, non
XIV・XV	ne...	ne...pas, ne...point, non, ...pas, ...point
XVI	ne...pas \longleftrightarrow ne...point	ne..., ...pas, ...point, non
XVII・XVIII	ne...pas	ne...point, ne..., ...pas, ...point
XIX 以降	ne...pas	...pas, ne...

\longleftrightarrow は競合関係にある変異体

まず、最も重要な修正点は、9 世紀以前を除いて、どの共時態をとっても支配的な形態と非支配的な形態が競合していたという認識である。特に 16 世紀以降は、支配的な形態が規範を形成するようになる。

文献学的には 9 世紀後半から 10 世紀前半には、『聖ウーラリの続唱』と『ヨナについての説教』が示すように、既に ne が否定辞として定着していたと考えられる。古フランス語の時期、すなわち 11 世紀から 13 世紀にかけて、ne...の単純形が支配的であり、複合形は支配的でなかった。中央部と西部地域では ne...pas、北部や東部地域では ne...mie の否定形が用いられることが多く、写本においても両者の競合関係が観察されることもあった。また ne が脱落し、二次的否定辞 pas, point だけによる否定形が現れた。

14・15 世紀の中期フランス語の時期になると、複合形の変異体が整理され、ne...mie が衰退し、ne...pas と ne...point のみが生き残る。しかしながらこれらは単純形と競合するには至っていない。その関係が変化するのは 16 世紀であり、ne...の単純形は複合形にその地位を明け渡し、ne...pas と ne...point の間に競合関係が見られた。

17・18 世紀になると ne...point が衰退し始め、ne...pas 形が規範となり、Non feray のような表現はもはや使われなくなり、単独形 ne...も一部の助動詞 pouvoir, savoir, vouloir においてのみ残った。他方、二次的否定辞だけの否定形...pas, ...point は存続した。そして 19 世紀以降には point 形が否定形の座を追われ、最終的に ne...pas, ...pas, ne...だけが残された。

参考文献

- ASHBY, William J. 1976: "The Loss of the negative morpheme, Ne, in Parisian French", *Lingua* 39, 119-137.
- ASHBY, William J. 1991: "When does variation indicate linguistic change in progress?", *Journal of French Language Studies* 1, 1-19.
- AYRES-BENNET, Wendy 1994: "Negative evidence: or another look at the non-use of negative ne in seventeenth-century French", *French Studies* 48/1, 63-85.
- AYRES-BENNET, Wendy 1996: *A History of the French Language Through Texts*, Routledge,

London and New York.

- CERQUIGLINI, Bernard 1991: *La naissance du français*, coll. Que sais-je ?, PUF. 邦訳, 『フランス語の誕生』, 瀬戸直彦, 三宅徳嘉訳, 白水社, 1994.
- COVENEY, Aidan 1996: *Variability in Spoken French. A Sociolinguistic Study of Interrogation and Negation*, Elm Bank Publications, Exeter.
- DE GOROG, R. 1990: “Early Seventeenth-Century Spoken French and Héroard’s *Journal*”, *Romance Philology* 43, 431-442.
- DURAND, Jacques 1993: “Sociolinguistic variation and the linguist”, C. SANDERS (ed.) *French Today, Language in its social context*, Cambridge University Press, 257-285.
- ERNST, Gerhard 1985: *Gesprochenes Französisch zu Beginn des 17. Jharhunderts. Direkte Rede in Jean Héroards «Histoire particulière de Louis XIII» (1605-1610)*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen.
- FOURNIER, Nathalie 1998: *Grammaire du français classique*, Belin, Paris.
- GOUGENHEIM, George 1974: *Grammaire de la langue française du seizième siècle*, nouvelle édition, A. et J. Picard, Paris.
- HANSEN, Anita Berit et Isabelle MALDEREZ 1998: “La négation en français parlé –une enquête en région parisienne–”, *Le français parlé. Actes du colloque international Université de Copenhague du 29 au 30 octobre 1998*, 45-63.
- KRASSIN, Gudrun 1994: *Neuere Entwicklungen in der französischen Grammatik und Grammatikforschung*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen.
- MARCELLO-NIZIA, Christiane 1985: *Dire le vrai: l’adverbe SI en français médiéval*, Droz, Genève.
- MARCELLO-NIZIA, Christiane 1997: *La langue française aux XIVe et XVe siècles*, Nathan, Paris.
- MARTIN, Robert et Marc WILMET 1980: *Manuel du français du moyen âge 2. Syntaxe du moyen français*, SOBODI, Bordeaux.
- NEUMANN, Sven-Gösta 1959: *Recherches sur le français des XVe et XVIe siècles et sur sa codification par les théoriciens de l’époque*, Études Romanes de Lund XIII, Lund.
- NOOMEN, Willem et VAN DEN BOOGAARD 1983: “4. Auberee”, *Nouveau Recueil Complet des Fabliaux (NRCF)*, 163-312, Van Gorcum, Pay-Bas.
- OFFORD, Malcom 1976: “Negation in *Bérunus*: a contribution to the study of negation in fourteenth Century French”, *Zeitschrift für romanische Philologie*, 92, 313-385.
- DE POERCK, Guy 1956: “Le sermon bilingue sur Jonas du ms. Valenciennes 521 (475)”, *Romanica Gandensia* 4, 31-66.
- PRICE, Glanville 1997: “11 Negative particles in French”, D.A. TROTTER and G. STEWART (ed.), *De mot en mot. Aspects of medieval linguistics. Essays in honour of William Rothwell*, University of Wales, Cardiff, 173-190.
- SANKOFF, Gillian et Diane VINCENT 1977: “L’emploi productif du *ne* dans le français parlé à Montréal”, *Le Français Moderne* 45, 243-256.

- SPILLEBOUT, Gabriel 1985: *Grammaire de la langue française du XVIIe siècle*, Picard, Paris.
- STEINMEYER, Georg 1979: *Historische Aspekte des français avancé*, Droz, Genève.
- STEWART, Gregory 1997: “3 Negative particles in French prose of the twelfth century”, D.A. TROTTER and G. STEWART (ed.), *De mot en mot. Aspects of medieval linguistics. Essays in honour of William Rothwell*, University of Wales, Cardiff, 37-51.

文法家

- D’AISY, Jean 1972: *Le Génie de la langue française (1685)*, Slatkine Reprints, Genève.
- CAUCHIE, Antoine 2001: *Grammaire française (1586)*, Texte latin original Traduction et notes de Colette Demaizière, Honoré Champion, Paris.
- DUBOIS, Jacques 1998: *Introduction à la langue française suivie d’une grammaire (1531)*, Texte latin original Traduction et notes de Colette Demaizière, Honoré Champion, Paris.
- MAUPAS, Charles 1973: *Grammaire et syntaxe française (1618)*, Slatkine Reprints, Genève.
- LOUDIN, Antoine 1972: *Grammaire française rapportée au langage du temps (1632) et Grammaire française rapportée au langage du temps reveuë et augmentée de beaucoup en cette seconde édition (1640)*, Slatkine Reprints, Genève.
- PALSGRAVE, John 2003: *L’Éclaircissement de la langue française (1530)*, Texte anglais original Traduction et notes de Susan Baddeley, Honoré Champion, Paris.
- VAUGELAS, Claude Favre de 1981: *Remarques sur la langue française utiles à ceux qui veulent bien parler et bien écrire (1647)*, Éditions Champ Libre, Paris.
- 今田良信 2002: 『古フランス語における語順研究—13 世紀散文を資料体とした言語の体系と変化—』, 溪水社, 広島.
- 川口裕司 2000: 「書かれ始めたフランス語—Global Latin vs Local French—」, 『語学研究所論集』, 5, 1-23.
- 武次三愛 2005: 「古仏語における否定形 否定の副詞 ne と否定の不変化語 pas, mie, point について」, 『言語情報学研究報告 7 コーパス言語学における語彙と文法』, 339-360.